

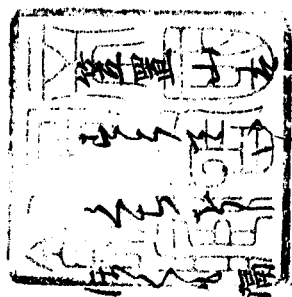
徳川幕府の勤定奉行。元禄元年。佐野良村
 土佐守の。天保十一年九月二十日。作事奉行
 行方勤定奉行に就任。天保甲三州米三万石。其書
 問答(徳川幕府 土佐)

かじのよき 梶野良村 一七七三-一八五
 三 江戸時代後期の勤定奉行。初名秀名。通
 称彦次郎、平助、平大夫、土佐守。久隅矩信
 の次男、梶野矩満の養子。安永二年(一七七
 三)生まれる。文政五年(一八一八)西ノ丸広敷
 用人、同四年仕敷用人、同八年幕付。天保
 二年(一八三二)奈良奉行になった。奈良奉行
 在任中、正倉院宝庫の修理があり、同四年の
 開封より七年の閉封に至るまで、幕府側の責
 任者として校倉の修理、宝物の点検を監督し
 た。同七年京都町奉行に移り、同九年作事奉
 行、同十一年勤定奉行となり、高五百石に加
 増された。同十四年印旛沼開拓を命ぜられた
 が、四ヶ月で御役御免となった。彼は水野忠
 邦の信任があつて、勤定奉行として天保の改
 革の推進に役買ったが、水野の失脚ととも
 にその職を去った。嘉永六年(一八五三)六月
 十四日没。八十一歳。江戸四谷駿河橋千日谷
 (新宿区南元町)一行院に葬られた。法名現功
 院藏徳信民厚謙山人居士。彼はまた好古の趣
 味があり、上方在勤中その方面の交遊も多か
 った。著書に「山城大和見聞隨筆」三州失立
 筆記」がある。
 (香川 栄一)



笠置紀行

土佐守梶野良村稿



山城國相樂郡三所、我守は此國に
 遠くを去るに過ぐるに
 此に於てのみやに如きは道不
 可からざるありしを立寄る
 とかけて有るは此處より一高道もいそが
 しくなりしを恐るは是れ如るを
 思ふ外は徳守も如くも其れを
 八月六日に京を出て、

云々と三代實録に云へらるる所なり此司の用ら
るるハ和銅元年に元明天皇岡田離宮に行幸ま
し、此より弘仁九年の八月長門國小鏡司と定
らるる、迄の間和同萬年神功隆平の四鏡に此
所を造らるる富壽神宝鏡の末等にも拘ま
るる所と和同開珎も初のみしと神龜天平の頃
を早く此鏡の廢れしと云ひ、中外鏡史に任
りて云へらるる猶淺く尋入て明らぬ出人
を云ひ待て此里を籠の原と云へらるる所なり
和束郷より云へらるる大川を隔て加茂郷

に從ふといふを彼三代實録に岡田鏡云々と
云へらるるにても亦今ひて古よりの定と云へらるる
所なり此密田ハ川南より加茂郷の別名に似
鏡司村より東を直に危し檜木の宮駒返りの
岩ふしといふ苦しき所をへら、行程に文字に
ハ木屋と書てらるる所なり舟津より云へらるる
を和束郷とハ山越ふららに同し郷中なる松田
村の分内より有王越の道ハ和束郷を通り
て此木屋の里より出たりけり此里越過て少
川より五軒家の渡りて川の南に通る舟津あり

かの岸に南笠置の離里ふる小家五つ河をわ
た名行ふとやよ此方の岸に人けもけ家
よ北笠置村をその間よりすれく家居ありて
勢の名を草畑とよ其親村に切山村とよ大凡
家より山の尾のふりけきく箱あり種なき
ふんやうに里構を分川向ふをえよるめ
水く今行通より本を陽をえよ行先
谷川めきなる所あり左よみ入らみめより
て又大川の四よ出りくさくして北笠置ふ至
る靴の原乃二井川より五十町より一筋の川

添道をとより来ありかたの河辺に岩山の杉
茂く生ふるかたし出され川海の道を絶て俄
り北なる取のありて又東にたよみつ、乃に
しを峠と越るを伊賀のふり、行あり渡より
伊賀強し運る舟も此舟着と限えよ爰より川
上へを更ち、た紀舟に積荷を、事ゆゑぬら
りき、はわ、舟あり、の大津也、これ、何れ
の河屬あり、市庫めき、商人も有る、舟
下、舟川、に、村長も出、送、町、送、坂
道と少の行、を、左の、家、不、乗、物、さ、よ、を、これ

奈良より北迎ふ所の小きくはる家お待受の
て昼食なり取らざるはめり大なる此所のまぬ
ハ北より東にぬれる山其高き大なるはる
西を今来一方ありと思の外小山と云りありて
川下をいづはるもさす扱うは東の岩山の
きりひ尾なきありありとふ類をわたり
伊賀路を越る此の程より南に聳えすみ
これハ川に臨む所をハ汀とも峯を遠く
さし出さるめとも覺る南の岸よりとらへて歌
これハ北岸のやうに川の上をいづ覆へる如

まじをわたりて頂上の高きはるいづ
北を南のまじやいづん今吾り居る所も川を
遙に見おろして愛ひしるも木をいづす猶
たし向つて大空をけりおありしるりの高ね
りかく大方をあらしてはよいづへのま
置の城を何処をと関を此川向あり山乃と
を其所をとも候へて登りもらばし覺て登
る道やいづるもいづを向の岸に南登置村と
申を通りてこの山の西南の麓に至れば正面の
道に北よりよき登るに道に申すに候はる此

あふ山賤も「道近」とも木の根岩角子
取付ふりて行へし馴て修へとも所の者す
少く作きをなやむ登りてまやも候ハ
す名を赤井ら脊と申尾脊と申侍りてま
陶山り悪入と申道と申ハ山の東北の尾せり名
り殊更はけりき上ふ常は用ふ所なれを山
賤なる通ふ候も守とよ赤井ハ阿阿井み
て佛ふを向る阿阿の井ふりてありてや
名有らん根の尾山の阿阿井の坊も思ひあはさ
るう五社百首ハ五月雨を水上増る泉川笠置

の山も雲かえれつとよまきハ「道近」も
きふりてありて少く木の根を
此山はけりてなやむ候も赤井ら脊と申
生山と申を岩山と申も木も茂りこ
りて赤井ら脊ふりてまに爰と申の真面ふ
まを黄葉の時なりと申候も覺ゆ其の
よ勝を大石と申も出ると色黒く錆
うりて成る也神世と申候も雨露も
まに乾きかえりて濡来りて年月のかき
まを思ふも中々に今更なきなり主上

の御座とあるれあり本堂の跡といふを頂上の
たひくると松の木二三十楯の高さもおふし程
は立並り其西より出るとその跡あり
貝吹岩といふ龍城のつぎに藤の寄るを驚
かすことあり行の跡もいふ彼の時の合戦
の趣かけひきの貝ふく吹つてを松も木へ
す今昔物語にむし長の皇子狩は出ず、日
敷を追ふみこも山路つとひは駒を早めら
れ、其駒修りみ走り進ん此山の谷に臨る
巖の上を飛かしてとあり、

と念して吾命取らざるを寺と造らんやの
とまひに駒後さあり退きて老く胆も強ひ
しうにめしる笠城ありとて其石の上を並
て後此笠置寺とは建つてと書とゆを笠置
の文字より造らる物語に置くといふ言の
趣とも思ふとさぬ後世人の拙さを苦笑の極ふ
りけるゆへに笠を取晴まてさなく常の事
に山科に笠取山ありてより宇治和東を経て爰
は奉れを笠置山あり其野も遠くは名も又雌
雄のやうに相むりふとやありきいふれもあ

其の如くは、古くは
佛高人等のお高き
たうされ名跡志すは是を遺編記云くは天武
ま若くは木川、時の事として取添へず
もこいふは、やうと出く河辺下
其の舟三四艘江を流し、舟を動かすにせ
川原に廣く流し、南に片うて獲てこれ
ハ舟の動かしおろす間、早く岸に
寄りて、舟の舟に賤う伏家より舟
を、舟の舟に大石あり阿弥陀岩といふ赤

井ヶ脊の山口より、西に舟で行川深あり
と道も狭く、以南笠置の里は北よりいきは
ひ増して大なる家もちいさなり多く、尾背子
て高き造り、蔵あり家と建並へ
う中より川原より酒屋の家とまじり、
石垣高く積り築牆あり、一家蔵棟敷多く構へ
る北の岸より、舟を、左右の家と
に高き石物品も此山陰に、誰の人の用み
んとたふし、舟の舟に、男も女も疑
申す、舟の舟、色目近京難波の

時、乃風流、おろけ、よまに構の思、や、
此里、富、う、とを推、ら、れ、ら、山、里、ハ、山、里、ハ
一、清、き、を、食、し、き、智、ひ、な、し、ハ、一、結、り、な、
ト、ハ、夕、乞、ん、山、の、裾、と、平、た、に、め、ら、行、や、う、
ト、ハ、山、口、ハ、身、孔、ハ、思、節、如、く、ハ、ハ、あ、ら、て、大、や
う、笠、置、山、の、南、面、乃、ち、な、ら、は、う、西、下、り、に、延、出、と
ハ、尾、脊、と、傳、ひ、登、初、ら、石、之、頂、上、を、ハ、町、と、い
ハ、あ、ひ、と、存、ふ、め、ら、左、よ、ら、登、極、し、り、ハ、一
の、辻、堂、二、の、辻、堂、と、ハ、仙、居、を、言、ふ、り、
て、唯、の、け、ら、下、ら、れ、や、ま、し、り、後、を、お、ら、う、一

の、辻、堂、迄、ら、ハ、三、町、を、登、上、れ、ハ、川、原、の
末、切、山、村、の、山、里、ハ、目、の、下、に、石、を、お、れ、ら
道、ハ、く、と、登、ら、ぬ、ハ、か、け、ら、を、ま、た、木、
や、ら、山、路、の、老、け、ま、の、け、ら、山、ハ、思、ひ
一、所、の、な、ら、も、高、う、な、ら、此、辻、堂、ハ、
ハ、路、の、左、の、山、の、そ、と、少、平、ら、ハ、引、な、ら、し、
ハ、方、丈、を、ら、ハ、造、ら、る、四、阿、羅、を、ハ、壁、を、
も、お、ら、て、石、渡、ハ、と、な、ら、う、ハ、後、ハ、淺、き、谷、ハ
ハ、方、越、遠、く、及、ら、山、ハ、赤、井、ら、脊、の、南、ハ、
ハ、亭、ハ、ゆ、ら、人、是、ハ、覆、ハ、ま、ハ、小、笠、置、の、里、ハ、見

又其の山の東につき又一きは聳えは
今登らんと言ふ坂路の上也此より先の山のあ
らひより北東はあつて殊更に打上りたるを
元弘の皇居たり此山の究竟を仰ぐも此を
まき山の 空目ひかり

山とありてその舟着し帰るをらむより川上
より舟のほろつき設しより此液瀧にわたり
るもこの舟は少川上を俄に深くおろし
り舟を飛の軒より出ると北と南の山互あひ
て空をこすなりこも叢の石をぬるときの

何れけしききなり唐繪の舟を及ぶる
蟹岩と申すに其形よりて名付たり長と
三ひらばなりとありぬる若きものなり
なり

蟹岩のなりけりけり空目つら
ひのせしれなり此といふ舟南に高ね小目
りきぬるなりその名をわたり細くよむか
けらり為の和に穴めきなり此といふ名なり
岸に道ありて猪鹿なりありて野といふ
まにありてなり細舟も出来て大岩の下に鯉

のひまをばらんとて竹竿をとりて
穿らばつ、網をらぬおひくくは
かゝる水底を沈めぬおひくくは
く、竹竿の方より子やぐをゆけ、此青瀬
の底の心えきれぬとよりよは物なほ
ふ行て一網をきて試み候へんといひも
ひ弓杖二丈ほくを二度三度うりて
うりて岩の上より胸乳より濡ら
見れば網取て二三度か入るは獲物なれ
おひくひくやうきと舟よりうり

せ
せ

り岩のまじり寄る時遠くおひくく
いりて聞へば水垢滑らぬとて取り
わつし侍りしおひくくは清き山川も
渡りぬおひくくは心得をぬりて
二三町さきの舟に南の山の東北の
て陶山や夜討の道乃治つしよもけし
き所りし谷口あれも町の千手ら龍の方
て奥津かまじ常は水行り谷の東も山
けりおひくくは此山の岸根とひくく一町
るては俄に川残るけりて舟底のさし音

く関ヶ原に築置の岩山も是より東に山絶てう
み峠を越る旅人も此北岸の川添道を下り来
る処あり此瀬より川上はくまひさき舟あり
てに通るかともいふを爰舟とて舟を曳
ぬるは川上の南に小山ありて黒く茂
りては丸山といふありて南より流
る小川ありて布目川と名付く丸山の東に飛
鳥路村といふかゝれ里あり其さへ東南に山
高く西を布目川を限り北を此大川を隔てれ
何方に通人も道ありとていふをいふか

世にむきとて様とていふはんといふは
の申傳ふ陶山に夜討の時此里のよも道ひ
きしと帝を苦しめ奉り陰謀を蒙りて一村を死
すべしと誓ふと申て今に此近き村に
往奉りて女子を嫁取婚取にいふは
まといふはとていふはとていふは
をいふは水戸殿に小戴真経父子を論して使其盡
忠尊氏者移之於王室則豈不與中興諸將媲美哉
其不知順逆之理也といふはとていふは
間もたつとていふはとていふは

うもあはれんふた軒二つを得るまれと烟
子らう心ほくは是え是うふん今ハ時も移
るぬましく催してさう戻る程を述べたも
足し陶山う道のみうをこゝに心とくめ
て頂えをいふらほけふんと見上るに胎
肉を足す大石をいふ及ふれはうれう
まなふ北のちひよふ目とれも木立茂く
て岩ありを舟のかかりり其さゆ明ふり菱
置の舟をちまきと舟聞らけう川原の真砂夕
日はかやまを鎮え免う閨の戸ふと明るれ

ちくせん心ち守家う馬をも小舟子のせそ下
部孝う舟もつきくは木津をさして舟下る南菱
置の西小栗栖の天神とて茂りうる森あり菅神
の居りけし聞ゆと如何わらん森と里との間
は小川あり桐橋掛う此川の水を大和國添
上郡廣野村とて國界もいと近し北の岸の尾上
りく切山ひく此家居も今をけし足へ渡きく五
軒家の渡瀬昼見し舟もさう守渡守も居るれハ
夕まれハ人の行春もあましを栗栖の森う此
少し川下近き汀の竹むらに在るれて道あり

とも又ぐい木屋の舟津の北の山打くけしん和
東郷の山越さもと舟おけゆの南の岸を笠置と
り川辺傳ひの道おてこつより南の谷の奥ふ
る山田村を經て加茂船の鬼並むしよまや云
其山田村も加茂船の出村と聞かを笠置の隈と
大う舟此邊ふつし五軒家は一町ふつ下と
り山も川辺も木立はなかくありて隠さる隈も
ふ紀草山は葛つたけひふより桔梗をみあ
しあふむくふふふふとやさし川添道
はなかくありて二三町の間は同一草山のけし

まゝおての谷水の流出なき所とも及んふ
中に鳴瀧と名付しものうとまゝに少高き所よ
り落らんるとしりふ

水もなかく音も聞てぬ鳴瀧は雨ふる時の名ふ
ふそ有くれと教ふぬふるふらふまふあ
まを又けしふらふやうされあひめを天の下
よ名を得る都の西乃鳴瀧まゝ昔はしり今
もけし名ふ負つらにおけぬとて笑ふ此
谷口乃西辺より俄に山の姿けはしり成て木立
も茂く殊に高祇の方の松のこを黒みそ

る川も此山岸より片寄るれハ暮らては舟を
形のうらハ燈かりき足元すましく北の川原遠
るく夕るを残るん鉄司村の家も竹藪の絶間
よりむくく入る川原より蹲ねらよの少動出
て此舟に向ひて鉄司村のよの向つるよ
一名のうらハと菘一側の口とまき臺

出すの火を舟に、来るけれと出せしと木
くぬすき物り取あつす　　ふやといを招
きし袖もけきりのとと継く川上遠くかへ
り及せし致山陰の暗きふ十町けりも有下ん

と下る舟の早くをて唯志くのやうを山を
高うて木立も茂くぬおるけりもふく並
る小谷の中に探るん四方十間をり竹藪あ
りそく小物数葉赤々もかきふあしき声の限
り瞬るものあり豊虫の集りなをふひひ
雀のねくを付くもいも有て室あぬ間
は舟の下り進るんその声遠さうてつて下る
りぬを何よあけん龍の原に向ひて川の
流さるるハ二井川の落合の野に流圍り引
るひて水もさく澄り此岡といま川の方よ

りてまにきれう切そなやえ一たの
為の石壁より上松の木と下のふみま
きりたてらる川向に加茂姫の加茂明神
を延喜式に岡田鴨神社とて山城風土記に
山代の國岡田の加茂とて又天牟の恭仁の
故宗に式了岡田國神社とてふらたはし
あふけり岡田といふ名を加茂といふよ
りたまらふや和銅の行幸貞觀の林銅共
記録に明らかふは今岡田といふ名とて
人なきまをといふべきなりと恭

仁の舊都魔原離宮に并項集め置くる勅物と
も今此処に取出ておつて照して思ひつ
る川浪志乃暮らして近き野山も又之わ
くす成ぬ下下いふとて人舟又南に
まき下舟屋といふ所の荒れ堤の上町
造りて燈の光も家々に舟着とおほき
所へゆき跪き居てけりいふ声のひら
りたまに聴くべし村長も暮中
空にさびきふ虫の音にまじり増えており
るき舊郷のなまら誰か人ももる

ふぬ櫃の方北暗くは利

心ありん人のそよめと悲う修く若狭まの虫
鈴ひりの声と舟少くは加茂郷の果ふら大
野村の宮の下しよ所は舟とくめて燈取ま
うあふかくる冬次の舟逆もは
けりけり家あり木津まを西へ何うて一里
ふらふら南の岸は法華寺野とよ所さ
し出されは其北とめ之舟はくは長し北の岸
は神童寺の峠と下り来しおふかかみ尾
上ふ立とくしひら松と星あはくはにみり見

て准とも然とをいふは法華寺野を廻りて
し頃此南乃奥とあはくは鹿脊山の不動とよ
うくと聞くは續日本紀ふら天平の都遷しに此
山の名をいふは萬葉の歌も鹿脊山陰宮
柱太敷おひまはみ古今集の旅の歌を都出
て今日三日の原泉川うら風寒し衣うと山と戯
まはるもあはくは名高きと然らる山深く引籠
りてんはあはくは舟一航の厚子に一向ひて
又並つる山もたかくてまはる大野山もさふこ
そ先目を付へうけはさきは鹿脊を此大堅

山の惣名ありしと後世の習ふ其おのの小名
の教増りぬまを大野ひく心としてを大野山
く其隣村あり観音寺村とこを観音寺山と
呼ばれて旅脊の名ハ西南の片端の不動堂あり
野を越るのありし所也

くやもゆとあつたを夏のき、けれを衣かせ
とに逢ら思ふといこもまきさむら母川風
のをよめきやれと幕おろさむら舟のふに任
と文治の昔重衡中將の取期のまゝを盛衰記よ
きしとハ渡瀬ありと川よおほくと川原

の礎に仁像ありて合掌念仏のありしこ
う形ありし今地舟底のさる音のさるし
ゆゆしきゆゆしき世の乱るしゆゆし
思やると舟の者と待まひけん下部らら本津
此舟着の燈らけりよあふれやと懸けハ幕と
少か、きとせよ及出立ふけようらうら飛之
た

舟と子と本津の川波と流しとまは嬉しき
さるし水のけとあ、あり間に舟ハ、さる
はさぬ里のあふまを舟と遠まると大とあ

聲と聞ゆは成の時々々下

上件一冊者為途中備忘所手記也適引用之
書目事實之年所等不得記者則以某字填之
類頃日更令侍臣忠友訂正繕寫而加一校畢

天保二年八月土佐守梶野 